

## Ⅱ ホンモロコ放流追跡調査

山根恭道・川島隆寿

ホンモロコは宍道湖淡水化後のワカサギ、シラウオの魚種転換対策魚として導入され、現在では種苗の大量生産も安定化している。生産された種苗は昭和56年度より昭和60年度まで、宍道湖西岸部の淡水域へ毎年20～30万尾が放流されて来た。しかし、宍道湖内での増殖は確認されず当分場がおこなった、ワカサギ調査により昭和61年6月24日斐伊川河口付近において、体長から2～3才魚だと思われるホンモロコが2尾（SL81.5mm, BW10.04g, SL74.2mm, BW6.4g）、12月16日船川上流において3尾（SL49.0mm, BW1.85g, SL59.4mm, BW3.30g, SL55.3mm, BW2.67g）の合計5尾が採捕されただけであった。そこで、本年度は昭和57年度から毎年10万尾程度の放流をおこなって来た、西潟の内（図1）1ヶ所に放流し調査を試みた。西潟の内は水門により宍道湖、佐陀川とは完全に仕切られ、面積は10ha、水深2m、湖岸は全体アスが繁殖し池内の水は、農業用水として利用されている。

### 1. 調査方法

#### 1) 放流魚と放流月日

昭和61年4月2日、放流尾数2.2万尾、平均全長6.10mm、体長範囲43～70mm、平均体長52mm、平均体重2.20g、平均肥満度15.6

昭和61年10月2日、放流尾数13.6万尾、平均全長57.2mm、平均体重1.5g

昭和61年11月26日、放流尾数10.1万尾、平均全長58.7mm、平均体重1.7g

#### 2) 調査月日と採捕漁具及び調査地点

昭和61年8月1日、9月1日、9月30日、10月6日、10月13日に図1の調査

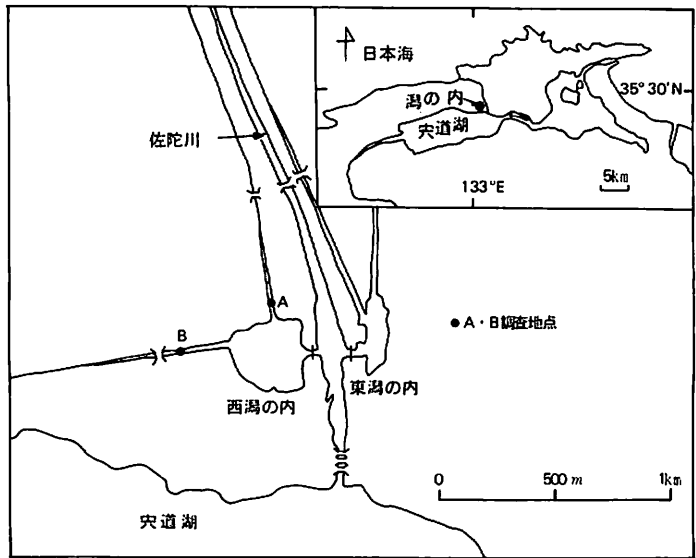


図1 調査地点

表1 採捕結果

調査月日	8月1日	9月1日	9月30日	10月6日	10月13日
再捕尾数(尾)	6	15	33	17	42
全長(mm)	5.65 ± 1.13	7.42 ± 0.56	7.47 ± 0.50	7.12 ± 0.41	6.82 ± 1.04
体長(mm)	4.75 ± 1.03	6.26 ± 0.47	6.27 ± 0.46	6.02 ± 0.32	5.75 ± 0.89
体重(mm)	1.94 ± 1.50	4.01 ± 1.03	3.98 ± 1.03	3.78 ± 0.79	3.3 ± 1.54
肥満度	1.564 ± 0.64	15.98 ± 0.42	15.92 ± 1.75	16.65 ± 1.53	15.97 ± 1.64

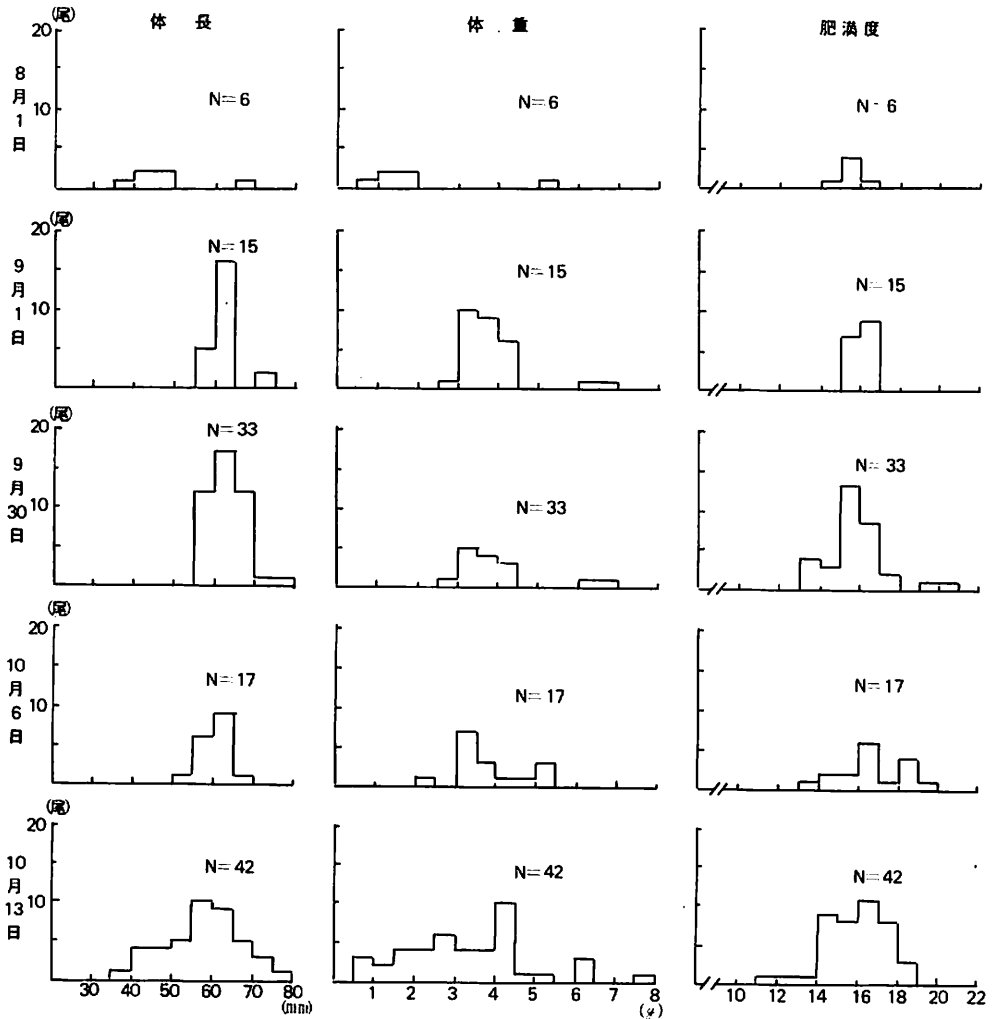


図2 採捕魚の体長, 体重, 肥満度の変化

地点A、Bにおいて、投網（2.5分目）によって調査した。

## 2. 結果及び考察

採捕結果を表1に採捕魚の体長、体重、肥満度の組成を図2に示した。

採捕尾数は、8～10月に5回おこない113尾であった。10月に採捕した魚は、10月2日に放流したものが大半を占めると思われる。8月、9月の採捕魚及び10月の一部については、4月2日の放流魚又は、再生産魚ではないかと思われるが、再生産魚であるとするならば、その間の日間成長は $0.5\text{mm}\sim 0.6\text{mm}/\text{日}$ となり、1才魚の成長としては大きすぎるため、4月2日の放流魚であると考えるのが妥当であると思われる。4月2日の放流魚だとするとその間の日間成長は $0.004\text{mm}$ となり、ほとんど成長していないことになる。肥満度についても、放流時15.76であり変化はあまり見られない。これは潟の内における餌料量が、ある一定の所で安定しているためではないかと思われる。

その他の採捕魚は、タイリクバラタナゴが圧倒的に多く、各調査時において70%以上を占めた。他にはフナ、モツゴ、コイ、タビラであったが、投網で採捕できなかった魚種として、ライ魚、ナマズ、モクズガニ、石亀等が確認されている。特にライ魚、モクズガニは数多く生息しホンモロコいの害敵となっているものと思われる。

したがって放流効果を把握するためには、採捕魚の年齢形質、産卵期の成熟度、種苗生産において各年齢ごとの成長、標識魚の放流による効果等の把握をする必要がある。